

## 能登半島地震発災に思うこと

令和6年1月1日16時すぎ、能登半島地震が発生しました。私たちは元旦から登院し、情報収集を開始。3日にはDMAT（災害派遣医療チーム）1次隊を派遣し、6日には2次隊を送り出しました。



初動では道路の寸断により能登半島北部の病院支援が難しい状況でしたが、3日頃から輪島市や珠洲市にDMATが入り、当院DMATも4日夜から市立輪島病院で支援活動を開始しました。石川県出身の職員もおり、実家で被災したり、避難所生活を余儀なくされたご両親の話を聞き、当時の生々しい状況を感じました。特に、断水によるトイレ問題が深刻で、どこも汚物が溢れ使えない状況だったと聞いています。

国立病院機構の情報では、七尾市の七尾病院では停電で暖房が使えず、ファンヒーターを病室に持ち込み対応しているとのこと。また、金沢医療センターでは能登地方から透析患者や骨折患者を多数受け入れている状況です。

今回の震災では、自衛隊やDMATだけでなく、消防や行政も迅速に動き、過去の震災（東北や熊本）での教訓が生かされていると感じます。一方で、南海トラフ地震が起きた場合、このような迅速な対応が可能かどうかは未知数です。三重県内でも能登半島のような状況が発生することが予想され、津波被害により救護活動が困難を極めるでしょう。

当院も金沢医療センターのように、傷病者を受け入れる拠点病院の役割を果たす必要があります。また、県内の災害拠点病院が連携し、多くの被災者を救護できる体制を構築することが重要です。そして、やはり事前の準備がどれだけ進められるかが鍵を握ります。

最後になりますが、自らも被災しながら懸命に救護活動に従事している石川県内の病院スタッフの皆様には心から敬意を表します。また、北陸地方の住民の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

（三重県病院協会会報 年頭所感より改変 2024年1月）